
天然彼女

オウギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天然彼女

【Nコード】

N1074D

【作者名】

オウギ

【あらすじ】

天然で毒舌な幼馴染の相手をする。主人公の苦悩の日々を描いた物語です。（基本的には1話ごとの短編にしますが、作者の気まぐれで続くこともあります）

第1話：人の生きる価値！？

「ねえ、涼人^{りょうじん}って何で生きてるの？」

「いきなりなんだよ。それより恵美^{えみ}また屋根から来たのか？」

「うん。そうだよ」

どうも、荻原^{おぎわら} 涼^{りょう}です。

一応この物語の主人公です。

で、この屋根からいつも乱入して来るのは、

隣の家の幼馴染^{くろさわ}の黒澤^{くろさわ} 恵美^{えみ}です。天然です。

今日もよくわからん事を言ってます……。

「ねえねえ、何で人って生きてるの？」

この世界には、生きてる価値の無いような人もいるんだよ？」

相変わらず、毒舌です。

「この世界には、生きてるに価値の無い人なんていないんだよ」

俺は、エミに優しく語り掛けます。

「うそだー!!」

どっかのホラーゲームのようにエミは叫んだ。

「絶対にニートって必要ないじゃん」

「ニートだってな必死に生きてんだよ。全国のニートに謝れ」

ニートの皆さんごめんなさい。

ただ、少しは働きましようよ。

「じゃあ、引きこもりは？電波さんは？」

「そういう人はな、心に大きな傷を持ってるんだよ」

全国の引きこもりサン、電波さん。

明日をがんばって生きましよう！！！！

「リヨウって何で生きてるの？」

俺は、ここはどう答えるべきなんだろうか？

「わからない。でもな、人ってそれでも必死に生きてんだよ」

たしかに、何で生きてるかなんて誰もわからない。

だから、今日を必死に生きて自分なりの答えを見つけるんじゃない
だろうか？

「ふん。なるほどね」

どうやら、エミはわかってくれたらしい。

「ようするに、ニートは死ねって事？」

なんもわかってねえ！！

第2話：学校

どうも、リヨウです。今日は、学校です。
俺も、エミも高校生でおんなじ1・5です。

「おはよ〜」

エミが、目をこすりながらやって来ました。

「どうした、眠そうだぞ」

「うん。ちょっと眠い」

珍しい。エミは普段なら午後11時には寝てしまつのに

「何やってたんだ？」

「丑の刻参り」

はい？またわけのわからん事やってたみたいだ。

「どうしていきなり。なんか呪いたいやつでもいたのか？」

「ううん。たまたまテレビでやってたからリヨウで実験しよう」と

「俺かよー!!」

どうやら、呪いの対象は俺だったらしい。

そつえば昨日の夜急に胸が痛くなったのはこいつのせいらしい。

「リヨウが悶え苦しみながら、逝くはずなんだけどなあ〜」

.....よかった。俺生きてる。

「リョウ昨日なんかかった？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・べつに」

ここでなんか言つとまたやりそうだから俺は、黙っておいた。
この恨みは今日の丑参りで・・・・。

「えゝであるからゝ」

今は授業中。

さつきから同じ事を言葉や言い回しを変えて何度も言っている。
さすがにいい加減に飽きた、クラスのやつらもうんざりのようだ。

「先生！」

そのとき、エミがビシッと手を挙げた。

「どうした、黒澤？」

「さつきから、同じことばかり言ってますけど。
アルツハイマーですか？」

教室がフリーズした。

「いきなり、何を言ってるんだね」

「さつきから、同じ事を何度も言っても意味ないですよ。そろそろ、
定年なんですから。」

仕事やめたらどうです？」

エミはこれでもかかってくらいの笑みをうかべている。

それとは反対に教師はもう泣きそうだ。

ごめんなさい先生。エミの代わりに謝ります。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・自習」

先生は教室から出てってしまった。

そのとき目から何かがこぼれた気がしたが気のせいだろうか？

その後、あの教師は学校を辞めて、田舎に引っ越したらしい。

第3話：家族の絆（前書き）

すいません、ほとんどノリで書いてます。

第3話：家族の絆

どうも、リヨウです。

最近急に寒くなってきましたよね。

ただ、エミは寒くなればなるほど元気になる不思議生物です。
今日も元気に屋根からやってきます。

玄関つかえよ。

「今日は何しに来たんだ」

厄介なことでないことを願う。

「最近、父さんが元気なくって……」

ほお。こいつにも優しさがあるらしい。

俺が、感心していると。

「まだ働いてもらわないといけないのに……」

ん？ちょっとおかしい気がするんだが。

「定年まであとかなりあるのに……」

「金かよ！」

「だって、ほかに使い道無いじゃん」

使い道とか言うなよ、親父さん可愛そうだろ。

もし聞いてたら……あつ！

窓の向こうにエミのお父さんがいた。

さっきの会話聞こえてませんように！

「だから、早く元気になってもらわないと」

急にお父さんの背中に哀愁が漂った気がする。

どうやら、聞こえてたらしい。

俺は、あわててフォローする

「でも、エミは父さんのこと心配してんだろ。」

うわ。エミの父さんが目を輝かせてこっちを見てる。
はつきりいつて気持ち悪い。

「心配？してないよ。」

やばい、エミの父さん泣きそうになってる。

「とりあえず、給料が下がったりしなければいいかな」

あれ？エミのお父さんどっかいつちゃった。

その日、エミの父さんは帰って来なかったらしい。

必死に仕事をして、家族に捨てられないようにがんばってるみたいだが
がんばってください。

第4話：学校と妹？（前書き）

ほとんど、ノリで書いてます。

面白かったら、感想等お願いします。

第4話：学校と妹？

「ねえねえ、兄さん」

どうも、りょうです。

さつきから、俺に話しかけてくるのは妹の香南かなんです。

ぱっとみ普通ですが誰に似たのかちょっとおかしいところがあります。

100%エミのせいです。

「どうした、カナン」

「今日学校でね校長先生がうそをつくことはいけないうって言ったの」

ほお。校長先生、いいこと言うじゃないですか。

妹のカナンが通っている学校は俺の母校だ。

今でも知ってる先生がいる。たまに近くを通る時に元担任がいたりして昔の話などしている。

「で、それがどうしたんだ？」

別に普通にいい話だと思うんだが。

「校長先生ね、嘘ついてるんだよ」

校長先生！教育者が言ったことを守なくてどうするんですか。
今の校長先生しっかりしてください。

「どんな嘘をついてるんだ？」

校長先生ももしかしたら事情があるのかもしれないから
どんな嘘をついてるか聞いてみた。

「ハゲ隠し。いつもヅラしてるんだよ」

ハゲか。この場合、仕方が無い理由に含まれるんだろうか？。

「校長先生も人間なんだよ隠し事ぐらいするさ。後で注意してあげなさい」

俺はこのときカナンに言うべき言葉を間違えた。

次の日、学校から電話があった

どうやら、カナンは同士を集めて、校長に注意しに行ったらしい。

校長は、教師全員の前でカツラを取るはめになってしまったそうだ。

ごめん、校長。

第5話：模様替えという名の嫌がらせ

どうも、毎度おなじみリヨウです。

今日も、精一杯生きてます。ただ、誰でもいいから助けてください。
なんなの？この状況？

「おかえり〜リヨウ」

「おかえり」

二人は、なぜか俺の部屋にいます。

部屋に鍵をかけても効果は無しです。どうやって入ってんの？

「なにしてんの？」

厄介ごとじゃありませんように。厄介ごとじゃありませんように。

厄介ごとじゃありませんように。

『気分的に模様替えしようと思って』

自分の部屋をやれよ。

「どんな風にしたらいいと思う？カナちゃん」

エミは、カナンのことをカナちゃんと呼んでいる。

こいつらが、一緒にいると絶対何かが起こる。

そして、俺に被害が及ぶ。早く帰ってくれ。

「ん〜。私的にはこの部屋要らないと思うんだよね」

ちよつとまで。勝手に俺の部屋を要らないとか言うなよ。

「汚いし、汚れてるし、キノコ生えてるし」

生えてねえよ。

「じゃあ、壊す？」

おい、カナン。笑顔で何いつてんの？

「それだ！」

「それだ！！じゃねええええええええ。何いきなり人の部屋壊そうとしてんの？」

さすがに、俺もキレルんですよ。

「だつてえ」

だってえ〜じゃねえよ超天然毒舌女。

「しょうがないよ」

しょうがなくねえよアホ妹。

その後、俺はホームセンターに行って鍵を買ってきた。
もうこれで、入ってこれないだろう。

俺の部屋のドアに鍵が今16個ついてる。

俺は安心して眠りについた……。

「おはようリョウ」

エミがいた。

「おはよう。兄さん」

その隣にカナンもいた。

まちで？

第6話：委員長？

こんにちは、リヨウです。

もう、俺の部屋に俺の場所はありません。

カナンとエミに占領されました。奪還不可能です。
誰かゲット　ツカース呼んでください。

「兄さん、電話です」

俺に電話？珍しいな。普段ならケータイにかかってくるのに。

「はい、もしもしリヨウです」

「もしもし、荻原？」

「委員長？」

「委員長って呼ぶな。」

電話の相手は通称、委員長。本名 さいとう 斉藤 あかね 茜。

1 - 5のクラスの委員長。俺の知ってる中でもっとも常識人だ。

「で、いきなりどうしたんだ？」

「実はねクラスのことと相談したいことがあるんだけど・・・。」

俺は、アカネの推薦でクラスの副委員長をやっている。

「今から、荻原に家行っでいい？」

「別にいいけど。」

「じゃあ、今から行くね」

それから、10分後にアカネはやってきた。

そして、部屋に案内すると。エミもいた。カナンもいた。

「あれ？委員長何してるの？」

お前が何してんの？

さっきまでいなかったのに、また屋根から来たのか。

「エミこそ……」

委員長びっくりしてるよ。

俺は、アカネに俺とエミが幼馴染でよく来ることを話した。

「なるほどね」

やっと納得してくれたらしい。

かれこれも2時間説明している。

「つまりどういうこと？」

まったく理解してねえ。

俺の周りには、常識人はいないらしい。

その後、クラスのこと話す時間は無かった。

第7話：人には不可能なこと

こんばんわ、リヨウです。

今日は、学生の味方休日です。

今日はあの天然毒舌女が来ないこと願います。

そう、思いながら俺は、ベットから起き上がった。

「おはよ〜」

俺の願いは、速攻で打ち砕かれました。

「はあ、今日は何で来たんだ」

おかしい、寝る前にちゃんと鍵をかけたんだけど・・・。

「リヨウ、進路って決まってる？」

おっ。こいつにしては意外な質問がきたな。

「俺は、まだ決めてない。エミは？」

「私、今悩んでるんだよね」

エミが悩むなんてめつたに無いはずなんだが

「何で悩んでるんだ？」

「私ね、小学校の教師に・・・」

「やめとけ」

こいつが教師になったら、子供がグレるぞ

「じゃあ、保育士に・・・」
「やめなさい」

こいつに保育士は向かない。俺が断言しよう。
昔、エミはよく近所の子供と遊んでるんだが、帰る頃には絶対に子供は泣く。

原因は・・・いろいろとエミに。

「じゃあ、美容師に・・・」
「・・・・・・・・・・」

昔、こいつに俺の髪を切らせたことがあった。

そのとき、俺は不覚にも眠ってしまった、それがいけなかった・・・。

起きたらスキンヘッドになってたから驚いた。

どうやったらハサミでスキンヘッドにできるんだ。

「エミは仕事しないでくれ。」

そのほうが安全だ。

「えゝ。なんで？」

「エミに仕事は向いてない」

「わかった、働かないで。男に貢がせろってこと？」

お前もう帰れ。

第8話：人間不信

キンコンカンコン

ども、リヨウです。

今、学校が終わって、家に帰るところです。

「荻原、帰っちゃだめだよ」

変える間に委員長ことアカネが話しかけてきた。

「今日なんかあったけ？」

「放課後、今度の体育祭の打ち合わせするって言ったでしょ」

そうだった、こんど俺のいる高校は体育祭をやるらしいから
クラス委員は今日の放課後集まる予定だった。

「で、今日は何を決めるんだ」

「今日は、各クラスのTシャツを決めるんだって」

うちの学校では、体育祭に各クラスのTシャツを作ることができる

「うちのクラスはどんなかんじのを作るんだ」

「私はね、のプリントが入ってるのがいいと・・・」

「・・・すみません、何でもするんで

それだけは、勘弁してください。・・・。」

俺は委員長から、すばらしい言葉を聞いた瞬間に
机の上で見事なDOGEZAをした。

軽く人間不信に陥るようなこと委員長の口から聞けるとは思わなかった

「なんで？」

アカネはびつくりしたように聞いてきた。

俺は、そんな危険なものをクラスのＴシャツにプリントしたがつてる委員長にびつくり何だが。

だって、１８歳未満は聞いちゃいけないような言葉なんだもん

「よく考えてみ、
なんてプリントしてあったらみんな驚く
だろ」

実際、俺は聞いたときに驚いた。

「私は、うれしい！！」

委員長の目はキラキラしてた

・・・委員長、元に戻ってくれ。

第9話：もう一人の家族

「リヨウ！今帰ったぞ」

騒がしくてすいません。

こんばんわ、リヨウです。

また厄介なやつが増えました。

というより帰ってきました。俺の家族の一人です。

「リヨウどうしたんだ？浮かない顔して」

あんたが帰ってきたかだよ！と言いたい

この、自分のことをまったく分かってない迷惑なのは俺の兄です。

兄おきわらの荻原そうすけ 莊介。21歳。

職業不明「ただ、こいつの財布にはいつも10万位は入ってる」

いつも旅に出かけてるためあまり家にいない。

今日もよく分からない旅から帰ってきたところだ

「今度はどこに行ってたんだ」

今度はどんな無茶をしたのだろうか

「秋田県にな」

「………？なんで」

特にソウ兄「そうすけの呼び名」と関連が無いと思うんだけど……

「鬼退治しに行ってきた」

何やってんの！？

もうこいつ人間じゃねえよ。

鬼って幻想の中の生き物だろ、秋田にいねえよ

「ただ、倒したのに住人から文句を言われてしまった………」
「」

ソウ兄はけっこう落ち込んでるようだ。

「それってどんな鬼？」

少し気になって聞いてみた。

「それが、おかしな鬼でな。わるい子はいねえかって聞くんだけ」
「今すぐ秋田の人たちに謝って来い！！」

どうやら、ソウ兄が倒したのはなまはげのようだ。
秋田の人たちごめんなさい。

その後兄はまた旅に出た。
もう帰ってこないことを切実に願う。

第10話：嘘と真実（前書き）

祝！10話

第10話：嘘と真実

ども、リヨウです。

今日は、休日なので家でごろごろしてまっす。

「兄さん、食後にごろごろしていると牛になるってホント？」

今日は、カナンか……。

エミは今日、どっかでかけてるからゆつくりできると思ったのに。

「どうした、いきなり」

「私、うそって嫌いな。真実が知りたいの」

エミみたいなこと言ってる。

カナン、頼むからエミのようにならないでくれ。

「牛にはならんよ。ただ、太りやすいつて言う表現だ」
「……………っチ、担任め」

舌打ちすんなよ。目がマジで怖いって。

「後でなんかいんねんつけて教師やめさせてやる」

……………ちょっとまで。こいつ何言ってるの？

「うそをつくやつ全員死ねばいいんだ。」

このままじゃやばいな……………。

「カナン。時にはなうそをつくことも必要なんだ」

「高校生がえつちい本買うときに年齢偽るとか？」

「どっからそんなの聞いた？」

「…………たぶんあいつだろうな。」

「エミ姉から」

「エミから聞いたことは信じてはいけません」

「人はな、自分の身を守るために嘘をついたり責任を人に擦り付けたりするんだ。」

「それはいけないことじゃないの？」

「そうかもしれないけど、人と人がうまく付き合うためには必要なんだよ」

「じゃあ、昨日カナンのマンガやぶいたの兄さん？」

「……………違うよ」

「……………」

「……………」

「うそつき。」

そういうとカナンは自分の部屋に戻っていった。

戻る途中で死ねって聞こえたのは気のせいだと思いたい…………。

…………気のせいだよな？

第11話：RPGをやろう（前書き）

祝！！5000HIT！！

これからよろしくお願いします！！

第11話：RPGをやろう

「ねえ、このパソコン、リョウの？」

こんにちは、リョウです。パソコン買いました。

俺が、自分の部屋で買ったばかりのパソコンをいじっているとまた屋根からエミがやってきました。

「ああ、この前バイト代入ったから買ったんだ。」

今日の俺は上機嫌、今なら全てを許せそうな気がする。

「ねえねえ」

横からエミが話しかけてきました。

「ん、どうした」

「このゲームやらない？」

エミが持っているのはパソコン専用のゲーム

「それどうしたんだ？」

「このまえ、下駄箱にラブレターと一緒に入ってた」

さいですか。何でゲーム入れたんだろ……。

「んで、それ貸してみ」

「はい」

俺はエミからゲームを受け取りパソコンに入れた。
するとパソコンから音楽が流れてきた。

クエスト・オブ・レジェンド

LOAD

NEW GAME <

OPTION

あなたの名前を設定してください。

「これどっちがやる?」

「私やる!」

「じゃあ、エミな」

主人公 エミ

あなたのパーティー（3人）を設定してください

「これは、俺と誰にする?」

「カナンと委員長でいいんじゃない」

パーティー1 リョウ

パーティー2 カナン

パーティー3 アカネ

あなたとパーティーの職業を選択してください

「けっこう多いな。どうする?」

「私これがいい」

主人公 エミ 職業 話術師

うん、ある意味あつて。毒舌なことか。

「じゃあ、俺は」

パーティー1 リョウ 職業 ナイト

「他のどうする?」

「ちよつとマウス貸して」

そう言つて、俺からマウスを奪つて他のパーティーの職業を決めていった。

パーティー2 カナン 職業 真実の追求者

よくこんな職業あつたな。

パーティー2 アカネ 職業 委員長

委員長つてどんなことするんだろ?

「これでよし!」

ほんとにいいのだろうか?

•••
u₁u₂u₃

第12話：RPGをやろう2

ども、リヨウです。

今、俺とエミでゲームしてます。

勇者一行は村に着いた

エミ「これからどうする？」

リヨウ「まず、村長の所に挨拶に行かないか」

勇者一行は村長の家に向かった

村長「勇者様！この村を救ってください！」

リヨウ（いきなりだなこれ）

村長「村の向こうの山に魔物住み着きまして村に貢物を要求してるんです。

御礼はしますので助けてください。」

エミは毒舌の魔法を使った

エミ「あんたが貢物になればいいんじゃない」

空間が凍結した

村長は精神的に98のダメージ。対人恐怖症におちいった

村長「お願いですからそれだけは」

村長は土下座した。リヨウの心に罪悪感を与えた。

リヨウ「わかりました……。」

リヨウは場の空気に流されてしまった。

勇者一行は村の向こうの山に向かった

「ガアアアアアアアアア」

モンスターが現れた。

（いきなりボスカよ……）

エミ「委員長とカナンは敵を足止めしてて」

エミはパーティーに命令した。

アカネの攻撃。

アカネ「あなた、
でしょ。」

アカネは禁断の言葉を吐いた。敵に80のダメージ。敵は混乱した。
カナンの攻撃。

カナン「最終奥義『デ・クルウ・ソレントル』」

しかし、MPがたりなかった。
リヨウの攻撃。

リヨウ「てや！」

普通に敵に切りつけた。3のダメージ。
エミの攻撃。

エミ「ピーーーーーー」

エミは敵を自殺に追い込んだ。
勇者一行はバトルに勝った。

「このゲーム何？」

明らかのおかしいだろ、話術師最強すぎだろ。

「けっこう面白いよ？」

エミはこのゲームを気に入ったらしい

………つづく

第13話：食欲は突然に（前書き）

いったんRPG編を中断します。

またすぐに更新するで少し待っててください

第13話：食欲は突然に

こんばんわ、リョウです。

今、夕飯を作ってる途中です。

俺のうちは両親が共働きなのでだいたいいません。
だから、家事は妹と分担してやってます。

「兄さん。今日の晩御飯何？」

俺は料理が好きでけっこうこだわって料理を作ってる。

「今日は、中華系」

ちなみにメニューは、

エビチリ、チャーハン、チンジャオロース、ギョウザだ。

「今日は、グラタン食べたいんだけど」

おいおい、もう作っちゃったよ。

「今度自分で作れ」

「兄さん、それ本気で言ってる？」

カナンは料理が苦手だ。

どれくらい苦手かというと、毎回なぜか爆発が起こる。
ニトログリセリンでも使ってるの？

「じゃあ、明日作ってやるよ」

次の日

「兄さん今日の晩御飯は？」

「昨日、カナンが食いたがつてたグラタンだ」

昨日のうちにホワイトソースを作っておいたから
後は、オーブンで焼くだけ。

「今日は、カレー食べたいんだけど」

「……………何言ってるの。」

もう作っちゃったよ。

「……………明日な」

次の日

よし、今日こそ。

カナンの気が変わらないうちに……………

~~~~~

ん、電話だ。

「もしもし……」

「兄さん、今日友達の家泊まるから」

もう作っちゃったよ。

その後、俺はカレーを一人で食べた。

第14話：ニートと職業（前書き）

ニートの語源と定義



## 第14話：ニートと職業

どもども、リヨウです。

ただ今、学校で公共職業安定所の方を招いて  
職業の講演会やってます。

「えゝ最近では若い人にフリーターが増えてきています」

最近ではフリーターが増えていると問題になってるらしい。

「それと同時にニートという職にも就かず学校も言っていない人も増えてます」

「ねえ、リヨウ」

横に座ってるエミが話しかけてきた。

「どうした？」

「前に人の生きてる価値に付いてはなしたよね（1話参照）」  
「それがどうした」

今の講演とまったく関係ない気がするんだが。

「ニートってなんで働かないの？」

俺はニートになったことが無いのでわかんないけど

「理由はいろいろあんだろ」

「たとえば？」

たとえば？たとえば何だろう？

「人間関係とか？」

「じゃあ、ニートってクズじゃん」

「だから、前にも言ったけどニートだって必死にがんばってるんだよ」

全国のニートの皆さん重ね重ねすいません。

「だって、ニートって自分の部屋引きこもってエロゲーやってるよ  
うな奴らだよ」

「なんでエロゲー限定なんだよ」

「じゃあ、ギャルゲー」

なんかもう、やだ

こいつに付き合ってた将来ハゲそう

でも大丈夫！！今の時代、アデラン やりーブ2 がある

「そうだ、リヨウの部屋のベッドの下にあるエロゲークリアした？」

「だから何でそんなこと知ってたんだよおおおおおおおおおお  
おおおおお」

この後、講演会は一時中断して教師にものすごく怒られた。  
俺がハゲたらこいつのせいだ。

## 第15話：コスプレイヤー

こんばんわ、リョウです。

今俺の目の前で不可思議なことが起こっています。  
もし自分の部屋に帰ってみると、誰かが侵入してて  
ピ チューのコスプレをしてたらどうしますか？  
俺は・・・・・・・・ゆっくりとドアを閉めます。

「俺・・・・・・・・つかれてるのかな？」

さつき見たものを全力で忘れようとがんばってます。  
人って便利な生き物ですね  
そう、現実逃避です。

「疲れてるんだな、なんか甘い物食べに行こう」

疲れてるときは甘いものが一番  
財布の中身を気にしないで近くのケーキ屋のケーキ全種類集めよう  
かな。

いい感じにぶっ壊れて気とところで  
そろそろ現実に戻ろう

「いったいあれは何なんだ？」

たぶんあれを着ているのはエミだろう。

「・・・・・・・・よっし！！」

俺は、勇気をふりしつぼってもう一度ドア開けてみる。

「・・・・・・・・何やってやってんの？」

「あっ！お帰りリヨウ。」

やっぱりエミでした。

「何やってんの？」

「リヨウのゲームやってんの」

「じゃなくて、そんな格好してんの？」

一番そこが気になるんだが。

「委員長にもらったの」

委員長何やってんの？

「そうだ、リヨウのぶんもあるよ」

そう言つて、エミはなぜかゴスロリの服を俺に見せた。

「・・・・・・・・」

最近、委員長の性格が変わってきた気がする。

委員長、元に戻ってくれ。

さすがにこれ以上変人が増えたら困る。



## 第16話：RPGをやろう3

俺たちは見事（？）山のボスを倒して村に戻ってきた。

そのことを村長に報告しようと思ったのだが、

村がなくなっていた。

人の姿がまったくなかった。

「お前さんたちこの村に何かようかい？」

村人A現れた。

リヨウ「この村に何かあったんですか？」

いくらゲームだからっておかしい

村人A「村長がね対人恐怖症になってこの村が成り立たなくなっちゃったんだよ」

嫌に現実っぽい理由だな。

つーか、原因こいつ（エミ）じゃん。

エミ「根性ないね」

悪魔だこいつ。

アカネ「もう少し人として強くなろうよ」

だったら委員長はもう少し人として

平気で18禁ワードをいわないで欲しいな。

カナン「あの村長のうそつき。まだお礼もらってない」

ごめんなさい、村長。

それから、俺たちはすぐ近くの王国に向かった。

エミ「やっとなつたね」

リョウ「とりあえず宿屋に行かないか？」

村かここにつくまでの間2日かかった。

その間ずっと野宿だったから体が痛い。

アカネ「じゃあ、私は本屋に　　を買いに行つて来るね」

委員長がしゃべった瞬間周りの人がびくりしてこつちを向いた気がする。

カナン「私も本屋行きたい！今日、月間『真実の探求』の発売日なんだ」

そんな本買うのはやめなさい。

リョウ「じゃあ、宿屋行つて部屋取ってくるは。」

エミ「まって、私も行く」

～～宿屋～～

店員「いらっしやいませ。一晚4500円ですが泊っていきますか？」

ねだんが、現実に近いのは何でだろう

リョウ「一泊お願いします」

その後、俺たちはゆっくりと部屋に行き体の疲れを癒した



第17話：笑う幼い女の子？（前書き）

祝！10000HIT！！

この小説を読んでくれてありがとうございます。  
これからどうぞよろしくお願いします！！

## 第17話：笑う幼い女の子？

「オギ〱いる？」

ども・・・リヨウです。

風邪ひきました。

熱が39度あつてけっこうやばいです。

目の前に妖精さんが見えてきました。

こんな危険なときに来客者です。

「こんなときに誰だよ」

今日は、平日だから誰も来ないと思ったのに。

それに俺のことをオギって呼ぶ奴はあんまりいないんだけど・・・。

「どちらさま・・・。」

俺は、ドアを開けたことを心底後悔した。

「よっ！元気か」

俺が風邪引いてるときぐらいそつとしいてくれないか。

「元気じゃないです、今風邪引いてるんです」

「ふ〱ん」

「・・・勝手に上がらないください先輩」

この人は俺の先輩でうちの高校の卒業生。

みやもと 麻衣。

身長156cmで髪を腰まで伸ばしていつもポニーテールにしてる。そっち系の趣味の人はものすごく喜びそうな感じにかわいい。でも、俺は可愛いと思わない！

「俺、具合悪いんですけど」

「ん？気にしないで」

むちゃくちゃだこの人。

「静かに寝てないとヤツちゃうよ？」

「・・・・・・・・・・」

ナニをですか？

「今日はどうしたんですか？」

「後輩をいじりに」

普段のこの時間俺家にいないんだけどな。  
この人、超能力でもあるの？

「そういえば、さっきここにくる途中エロ本買ったんだけど」  
「・・・・・・・・・・」

そう言っただけで俺にエロ本を見せてくれた。  
たぶん店員ドン引きだろうな。

普通の人でも買わないようなえぐいやつだ物。

「どお？」

かなり危険な絵になってる。

見た目女の子がかなりえぐいエロ本持って笑ってる。

ん？ああ、言い忘れた。

先輩の性別は男だ。趣味は女装。

「・・・・・・・・」

俺は、熱で倒れた。

いろんなことにつかれたよ、パト　ッシュ。

## 第18話：旅の思いではフラダンス

「リヨウ、今帰ったぞ!!」

こんばんわ、リヨウです。

うちに知らない人が俺の名前を呼んでいます。  
全身真っ黒で髭ももっさりしてます。  
さて、警察でも呼ぶかな。

「リヨウ、なにやってんだ？」

「……………どちらさまですか？」

一応名前を聞いておこう。

「?。いきなりどうしたんだ?自分を兄を忘れたのか？」

「……………え」とソウ兄？」

「ほかに誰がいる」

知らない人はソウスケでした。

さすがにわかんねえよ。

だって、行く時とまったく違うんだもん。

「今回はどこいつてきたの？」

俺は、帰ってきたソウ兄にお茶を出しながら聞いた。

「ん、今回はハワイでフラダンスしてきた」

・・・くだらねえ。

この人仕事もしないで何してんの。

「リョウ」。いた、部屋にいないで何してんの？」

・・・厄介なのが増えた。

後なんで二階の階段から降りてきたの。  
玄関使ってくれないかな？ムリだな。

「っあ！ソウ兄帰ってたの？」

「よう、エミ」

この二人が絡むとろくなことになんねえ。

「今度はどこ行ってきたの？」

「ハワイだ」

なんか盛り上がったるし。

俺は、部屋も戻る

〱 一時間後〱

俺が下に下りてみると

いい年した自分の兄貴が見事なフラダンスを踊っていた。  
その横で幼馴染も一緒に。

「リョウもやるか？」

「・・・・・・いいです」

俺には、ここまで恥ずかしいことはできない。

だって二人ともよくテレビで見るような格好してるんだもの。

その後、エミにフラダンスを伝授してソウ兄は旅に出た。  
できれば、もう今月は会いたくないな。

## 第19話：キャラクター紹介（前書き）

今回はキャラクターのプロフィール等を書かせてもらいました。



## 第19話：キャラクター紹介

どもども、オウギです。

今回は、キャラクター紹介をさせていただきます。

キャラクターが増えていくたびにこの話も増えていきます。  
ではまずは、この物語の主人公のエミからです。

名前 黒澤 恵美 16歳

### プロフィール

高校一年生で毒舌。

好物は甘いもの。辛いものは嫌い。

ぬいぐるみが大好きで部屋に大小あわせて30個ほど。

この物語の中で一番暴れてるキャラだと思います。

はじめの設定ではもう少しやさしいキャラにしようと思ったのですが  
それだとあまり面白くないので軽くひどいくらい毒舌にしました。

では次に、この物語で一番不幸な少年

名前 荻原 涼 16歳

### プロフィール

高校一年生でこの物語の中で一番の常識人。

音楽が大好き。バンドを組んでいてパートはギター。

最近のエミがかまってくるのでギターの練習ができない。

この物語で一番不幸少年です。

次からは、もう少しだけかつこいいところも書いてあげようかな？  
今度、バンドの話もかいてあげたいです。

名前 荻原 香南 11歳

プロフィール

小学校5年生でまあまあ普通のキャラ。

まだ子供なので人のことをすぐに信じやすい。

なぞキャラです。

これからのどのような方向で行くかまだ決まってません。

名前 荻原 莊介 21歳

プロフィール

たぶん、この物語の中で一番自由な人。

無職(?)なのにもすごい金持ち。

名前 斉藤 茜 16歳

プロフィール

高校1年生でクラスの委員長。

まじめだけど危険な発言をする。

この物語の中で一番の危険人物です。  
はじめは、真面目なところとギャップを書きたかったのに気付いた

らこんなキャラに・・・。

## 第20話：俺的初夢方程式（前書き）

これから少し更新が遅れるともいます。  
ですがまだまだ続けていくつもりなので  
今年もよろしくお願いします！！

## 第20話：俺的初夢方程式

どもども、毎度おなじみリヨウです。  
皆様あけましておめでとございます。

「ねえ、リヨウだれに挨拶してるの？」

「この小説を読んでくれてる読者だ」

「？」

エミの頭から？がたくさん浮かんでいる。

「それより、リヨウ。リヨウの初夢なんだった？」

初夢かあ。壮絶なゆめをみたぜ。

おしつことか涙が溢れ出さんばかりの悪夢だぜ。

~~~~~リヨウの夢の中~~~~~

クールになれ俺。これは夢だ。

間違いない夢だ、じゃなきゃこんなことはありえない。

俺は今、富士山にいる。

どうして、俺のいる山が富士山って判るかと思われると
夢だからとしか言いようがない。

それより、俺の目の前には不思議な光景が広がっている。
ナスだ。俺の目の前にナスが転がっている。
それも一個や二個じゃない。

「・・・・・・ギャグ？」

なんと、3億個だ。何でそんなに細かく分かるかということ
これも夢だからさ。

そして、そのナスを鷹がものすごい勢いでついばんでいた。
その横で、エミがタカとナスを火であぶって食べていた。

~~~~~

よく、初夢に富士山とタカとナスが出てくると良いと  
言われているがこれはないだろ。

それに、俺の夢にエミが出てきた時点で

富士山（良）＋タカ（良）＋ナス（良）－エミ（絶対的悪）＝0

どんだけ、縁起がいいものが出てきたところで  
エミが出てしまえばプラスマイナス0だ

今年はどんな年になるのやら

自然と俺の口からため息がこぼれた。

## 第21話：始業式とみんな

どもども、毎度おなじみリョウです。

今日から学校が始まります。

しばらく見ないうちにいろんな人が変わってました。

その一例をちよつと箇条書きに・・・。

・クラスメイトA

髪の色が黒から茶色に、そして耳にピアス。

（うちの学校は、ピアス禁止になっております）

・委員長  
アカネ

見た目は特に変化なし。

発言内容が18禁から20禁POWER UPした。

具体的に言つとアカネの発言の部分が                      から                      になった。

<注意>良い子のみんなは真似しちゃいけません！お兄さんとの約束！！

（リョウは、ツッコミの疲れから少し投げやりになってます。）

・エミ

正月に会ったときと見た目の変化はない

毒舌も特に変化なし。

これ以上の変化は不可能らしい、というより変化しないで欲しい。

・担任

うちのクラスの担任が変わっていた。

ストレス系の病気で入院中だと新しいクラスの担任が言っていた。  
ごめん先生。100%エミのせいだよね。

・校長

はげた頭からカツラに。

一番の変化だね！

<注意2>なぜ分かったかというと、

校長の下髪の毛の色が黒で薄かったのに、茶色でフッサフッサになってたからです。

(リョウは、ツツコミの疲れから少し投げやりになってます。)

この変化によって

新学期の始まる集会のときに

校長が壇上に上がる瞬間、学校みんなが(教師も含めて)吹いた。

校長先生わけが分からずオロオロしてた。

俺は、校長先生に少しだけ同情してしまった。

ガンバレ、校長！！



## 第22話：委員長（悪魔）のささやき（前書き）

感想や評価などを書いていただけると作者のエネルギーになります。それから、改善点やどんな場面を書いて欲しいかなどを書いていただけると時間の都合上全て無理ですができる限り善処します。これかも天然彼女をよろしくお願いします！！

## 第22話：委員長（悪魔）のささやき

「ねえ〜リヨウ。学校終わったら、ちょっと付き合って」

こんにちは、リヨウです。

さつき嫌なことを聞いた気がする。

「エミ、さつき何て言った？」

先ほどのことは夢だ！！

「だから〜放課後ちよつと付き合って〜」

俺の希望は簡単に打ち砕かれた。

~~~~~放課後~~~~~

考える！この悪夢から逃れられる方法があるはずだ！

絶対に説明してやる！

じつちゃんの名にかけて！！

<注意>リヨウのおじいちゃんは普通の公務員（教師）です！

リヨウのおじいちゃんが名探偵とかいう裏設定はありません。

「リヨウ〜何してんの〜？」

………もうムリみたい。

その後、俺たちは商店街にやってきた。

「ここに何か用でもあんの？」

「つか、俺を呼ぶ必要があったの？」

「今日、委員長が言うには の発売なんだって」

そうか今日は の発売日なのかあ。

「つて！？*>*?>*?+rt r j x g? ? ? ? ?」

俺は、今現在の言語では解読できない言語をはいた。

「私ね、それ買ったことないからわかんなくってね。だから、リ
ヨウ買って来て」

ふざけんな、俺だってそんなもん買ったことないは。
だいたい、それって20禁じゃなかったけ？

「リヨウのベットの下に同じようなのあるじゃん」

なんでこいつ知ってんの？

「買ってこないと、ばらしちゃうよ」

その後、本屋の店員に年齢を聞かれ。

はずかしい思いをしたのは言うまでもない。

第23話：いぬ派？ねこ派？

こんばんわ、リヨウです。

「リヨウって犬派、猫派。どっち？」

いきなりなんの脈絡もないな、さっきまで最近の日本政治について熱く語ってたのに。

でも、エミにしては割りと普通の質問だな。

「俺は、いぬもねこも好きだな」

ちなみに俺の家にはいぬもねこも飼っている。

「私は〜ねこかな」

こいつにも動物を愛でる気持ちがあつたんだな。
でも、昨日の帰り道で道に寝てた猫を踏んでなかった？

「そつえば、委員長ってどっち派だろ？」

アカネか、案外まじめな奴って動物好きが多いんだよな。

「ねえ、委員長。委員長ってねこ派、いぬ派？」

俺は、たぶんいぬ派だと思う。

「私は、いぬ派かな」

「ええ。委員長ってねこ派じゃないの？」

俺は予想どおりだった。がエミの予想だとねこ派だったらしい。

「だって、いぬってなんかエロそうじゃない？」

そこか！！！！

「アカネ、いぬがエロそうってわけがわかんねえよ」

じゃあ、ねこはエロくなさそうなのか？

基準がわかんねえ。

「だって、荻原が選んだじゃない、だからエロいんだよ」

ごめん世界中の犬たち、俺のせいで君たちの印象が悪くなってしまった。

ん？？ちよつとまて

「何で俺が選ぶとエロくなるんだ？」

「ことわざであるでしょ友は類を呼ぶって、本屋で
なんて
買ってるんだもん」

あれか（22話参照）！！

いやでも、あれってあかねのせいだろ。

「変態」

・・・・アカネ。

お前は俺の味方じゃないのか？
その日、俺はもう誰も信じないことを心の中で誓った

第24話：犯人であゝれ（前書き）

第24話：犯人だあゝれ

こんにちは、リヨウです。

今、学校で問題が起こってしまい急遽HRが開かれています。

どんな問題かというところ、なんと学校内で花火をした馬鹿がいるらしい。

そのせいで、さっきから担任が犯人出て来いって言ってるけど出るわけねえじゃん。

しかも、エミもさっきから不機嫌だし。

何も起きないことを俺は願う。

カミサマお願いです、少しの間エミを止めてください。

「・・・リヨウ。まだ、終わんないの？」

やばい、怒りMAXだ。

説明しよう、この状態になるとエミの毒舌はいつもの三倍になるのだ。

「だいたいさあゝ、こんなことやって犯人出てくるわけないでしょあゝ」

エミ。それは、ここにいる全員が思ってる。

でもな、さっきから担任の視線がイタイんだよ。

しかも、何で俺？

エミの方見ろよ、俺関係ないじゃん。

「犯人もさ、もっと計画してやりなよあゝ」

イタイ。イタイ。ものすごくイタイ。

先生、その目線を俺の隣の席の奴にお願いします。

「犯人、絶対馬鹿だよ。死んだほうが少しはこの世のためになるんじゃないかな？」

犯人さん、ごめん。

俺もうあなたをかばいきれません。

『・・・・・・・・え〜・』

あれ、校内放送だ。

犯人見つかったの？

『皆さん、この学校内で花火をした犯人は・・・・・・・・』

誰ですか？校長先生？

『・・・・・・・・私だ。』

校長！？

何やってんの？

『みんな、すまない私も教頭も酔ってたんだ・・・』

教頭！？

あなたも？

その後、校長と教頭がただ謝るだけの放送が続いたのは言うまでも

ない。

第25話：G o t o 秋葉原

どもども、リヨウです。

「兄さん、あれは何ですか？」

今、カナンとエミと麻衣先輩で秋葉原に来てます。

俺なんで貴重な休日にこんなところ来てんだろ？

しかも、さつきからカナンが秋葉原に売られてる危険なもの（主にエロい物）

に興味心身です。

なんて答えようか？

「オギ、これ買ってきて」

そう言つて、PCゲームを麻衣先輩をもつてきた。

「……先輩。これエロゲーですよ？」

「カナンちゃんの教育にどお？」

馬鹿だ！！この人馬鹿だ！！

小学生から性教育とか早すぎだろ。

「……却下で」

「……早く帰りたい。」

「リヨウが好きなのはこつちだよね」

エミ、お前もエロゲーもってくるなよ。

「いやいや、オギが好きなのは純愛系だって」

そういう問題じゃないだろ。

「ちがいますよ。リヨウは鬼畜系が好きなんですよ」

俺、エロゲーとかやんないんだけど。

「兄さん。さっきからあの奇妙な踊りを踊ってる人はなに？」

そう言つて、道端で激しく踊ってるひとたちを指差した。

「あの人たちはねUFOを呼んでるんだよ」

カナンに真実を伝えるのはまだ早いな。

「で、リヨウはどっちが好きなの？」

お前ら、まだ討論し合ってたの？

「兄さんはどっちが好きなんですか？」

カナンお前も聞くな。

その後俺は、仕方なくどっちも買つて帰った。

エロゲーをどうするかで迷ったのは言うまでもない。

第26話：緊急入院

お久しぶりです、皆様。

最近急に寒くなってきましたね。

ながながとすみません。

ちよつと嫌なことがあったので……………。

つまり現実逃避です。

この前、急に胃に穴がきました。

医者が言うにはストレスの溜め込みすぎだそうです。

一週間の入院だそうです。

エミのせいだ、絶対そうだ。

ふと思うんだけどこのごろ俺の扱いひどくないか。

最近どうも、嫌なことが起こりすぎだろ。でも、入院中はしばらく

休めると思ってたんだが

でも、そろそろ学校が終わる時間だ……………。

……………今日も来るのかな。

来ないでくれ……………。

「リョウ。お見舞いに来たよ」

一番きちゃいけない奴がくるんだよね。

「そうか。悪いんだがそろそろ寝るから」

ナイス俺!!!!これならエミも帰らないわけがない。

「だめだよ。しばらく話し相手になつてよ」

「だから、そろそろ・・・。」

「机の下から二番目の引き出しの鍵の番号いくつだっけ？」

何で知ってんの？俺の秘蔵の宝を！！！

あれを買つたために年齢まで偽つたのに。

「・・・・・・・・。急に目が覚めたよ」

お前にせいだな。

それから、俺はエミの愚痴（毒舌）を聞き続けた。

「そう言えばさつきからさ・・・・・・・・。」

いきなりエミが真面目な顔した。

「・・・・・・・・。急にどうした？」

「病院でさ死臭がするよね」

看護婦さんこいつ追い出して。

第27話：dead or alive in 雪山（前書き）

すみません。

学生の敵テストが近いので少し休みます。

第27話：dead or alive in 雪山

「りよお〜。雪降ってるよ。」

そうだな、でもそんなこと言ってる場合じゃねえよ。

「何で俺ら雪山にいるの？」

「さあ〜？」

ども、いきなりですが俺とエミはなぜか雪山にいます。

何でこうなっただんだか……。

んんん〜。わかんねえ。

「で、どうする？」

「とりあえず、このまま下ってみよ〜。じっとしてたら死んじやうよ〜。」

確かに、エミの言うとおりこのままじゃ死ぬよな。

「とりあえず下るか」

その後俺たちは、自分の勘と勇気を信じて下っていった。
無理でした。

「ちょっと待った!!」

俺は、さすがにこれ以上行くのは無理だと思った。

「これ以上はさすがに無理だと思うぞ」

「でも、さっきかあそこにあかりがあるよ」

何でそれを早く言わないんだよ!!!

そして、俺たちはその光に突っ込んで行った。

しかしその光は、俺たちの希望の光にはならなかった。

その光は、湖が月明かりを反射していただけだった。

「リョウ」。私達死んじゃうのか？」

今日のエミは何か弱気だな。

「こんなことなら、もっと言いたいこと言えばよかったなあ」

やめてくれ。

これ以上きついのはヤダ。

「……たとえば？」

つい、聞いてしまった。

「校長先生の愛人の話とか教頭の借金の話とかかな」

ものすごくドロドロとした内容だな。

「あと、父さんのへそくりと母さんのへそくりの場所を同時に教えてかったな」

やめなさい。

下手したら、家庭崩壊起きるぞ。

その後俺たちは死んだように眠った……。

結論から言おう……。

夢だった……。

でも、夢の中の校長の話とかは実話らしい……。
正夢！？

第28話：バレンタインの悲劇（前書き）

バレンタインデーは明日ですが明日は投稿できないので今日しました。

今さらですが、誤字・脱字等ありましたら、おしえてください。

第28話：バレンタインの悲劇

今日は男子と女子がともにそわそわする日。

そう、バレンタインデー。

男子は、玄関のところでなぜか深呼吸。

女子は、なんか四角い箱を手にとってうろつろ。

何か、周りの空気がモテル奴とモテナイ奴で空気が違う日。

それがバレンタインデー。

「…………頼むから人目のつかないところでイチャついてくんないかな」

そんな、そわそわした空気の中でイライラしてるリョウです。

「そつだよねえ」

その横で、チョコを食ってるエミも不機嫌。

「さすがにねえ。キスまでしてるとねえ」

…………マジ？

バレンタインデーだからって朝からがんばりすぎだろ。

まだ朝の8:00だよ。

しかもここ、学校の玄関だよ。

そんな風な危険な今日。

たぶん、今年も委員長とかエミとかかくれるんだろつな。

今年は、生きてるかな…………俺。

そう思いながら教室に着くと

「リヨウ。ハイこれ」

「サンキュー委員長！」

早速、委員長から一個もらった！！

そんなうれしい気分のまま、授業はずっと上の空。
そして帰宅。

「兄さん。これどうぞ」

カナンからもゲット。

まあ、2〜3個もらえりゃ別にいいかな。

「さっそく、食うかな」

まずは、カナンのから。

「ん〜。普通にうまいな。去年より腕上げたな」

でも、髪の毛がもっそり入ってるはナンデナンドロ？
よし次は、委員長のにしよう

「……………これは今年も無理だな」

去年に同様に断念。

まず色、綺麗なピンク色。

そして匂い、保健室と病院の匂い。

最後に形は、龍。

ものすごく精密に作られている、たとえばなら中華料理屋にあるあのリアルなやつに近い。

でも、見た目に騙されてはいけない。

見た目よりも匂いやその他のことで判断しましょう!!!。

「・・・・・・・・。」

そろそろ、一番危険なのが来るんだろうな。

・・・・・・・・屋根から。

コンコン

窓のほうを見るとそいつはいた。

「リョウ」。作りすぎちゃったからあげる。

べ、別にあ、あんたのために作ったんじゃないからね。」

・・・・・・・・ツンデレだ。

こんなキャラじゃなかっただろ。

「キャラがくないか？」

「ツンデレの方が萌えっぽくない」

・・・・・・・・萌か。

「で、はやくたべてよ」

それでは皆さん逝ってきます。

どうか無事で帰ってくるように祈ってください。

さようなら

第29話：顔のいい奴には裏がある

こんにちは、リョウです。

今日はうちの高校の受験日そのために一般の生徒は休日になるはずだった。

ただ、各クラス2名をのぞいて……。

その2名は会場作りとかその他雑用のため休日は無し。
それに何故か俺が選ばれた。

「オーライ、オーライ……。」

俺は駐車場で車の誘導したり
受験生の道案内をしたりしている。

「ったく。何で俺が休日返上で学校のために働かなくちゃいけないんだよ」

そもそも、あいつが俺のことを推薦しなければ……。

「なにサボってんの萩原？」

今回の原因さんが来たよ。

「別に。誰かさんのせいで教師にパシリにされてるだけですけど……。」

「はいはい、スネない、スネない」

我がクラスの副担任の北野^{きたの}連夜^{れんや}。

年は、25で東大卒の超エリート。

見た目もかなりかつこいいとのことだ。見た目だけはな……………。

昨日のHRで担任が出張のために代わりにこいつが来たのはよかったのだけど……………。

今日の会場作りのための人を選ぶときに俺の意見無視で勝手に決めたアホだ。

「今日は、早く帰らないといけないんだ。悪いんだが早くやってくれないか」

やっべー、クソうぜえ。

セリフ言った瞬間に前髪がサラッと風になびくのがさらにうぜえ。しかも、こいつは……………。

「今日は、ママの誕生パーティーがあるんだ」

重度のマザコンだ。

第30話：今、旅立ちのとき！？（前書き）

面白かったら。

感謝ください、作者のやる気が上がります。

そして、やる気に比例して更新スピードもUPします。

第30話：今、旅立ちのとき！？

皆様、こんばんわ。リョウです。

今日は、休日でひつつさしぶりにゆつくりできた。

今日は、エミも来なかったし、ゆつくり4回も寝ちゃった。

・・・やべえ、今夜寝られねえよ。目ばっちりだし。

「カナン、何見てるんだ？」

俺が、二階から降りてきて居間に向かうと

カナンが、真剣にテレビを見ていた。

「アニメだよ、兄さんも見る？」

そついや、この時間帯ってアニメやってるんだっけ。

「とりあえず、テレビから離れなさい、テレビをゼロ距離で見たら目を悪くすんぞ」

さすがに、ゼロ距離で見たらやばいかな。

そして、カナンが真剣に見てるアニメの内容が気になってきたので、俺も一緒に見ることにした（もちろん、ゼロ距離じゃないヨ）

「・・・兄さん、どうしても行ってしまうのね」

（どうやら、兄と妹の別れのシーンらしいな）

「ごめん。でも、どうしても行かなきゃならないんだ分かってくれ」
「わかったよ。じゃあ、兄さんこれ持って行って」

（妹が何か紙みたいな物を渡してんな、あれなんだ？）

「これね、私が兄さんを思って一生懸命書いたんだよ」

（この妹、優しいな。このアニメけっこう感動するかも）

「これ、見ていい？」

「うん！」

（やっぱり、似顔絵とかか？）

「……………」

「どうしたの兄さん」

（何か兄貴のほうの顔がひきつってないか）

「これを僕に？」

「そうだよ、一生懸命書いたんだよ。遺産の管理書と生命保険の書類」

（……………ずいぶん現実的リアルだな）

「そうか、ありがとう。じゃあ行ってくるよ」 （ものすごく爽やかな笑顔で）

「いつてらっしやい!」

「このアニメ面白いか？」

俺は、気になって聞いてみた。

「うん!」

ものすごく笑顔なのはいいんだが、このアニメのどこが面白いんだ面白い点を2、3日かけて討論したいきぶんだ。

「兄さんにも遺産の管理書と生命保険の書類書いてあげよつか？」

変な影響受けちゃった。

第31話：マザコン卒業式（前書き）

面白かったら、感想ください。

あと、今書いてるギャルゲーイベントシリーズで書いて欲しい場面がありましたら

それも、それも感想と一緒に書いてください。

第31話：マザコン卒業式

「えゝ、本日は……」

ふあゝあ。大変眠いリョウです。

今日は、我が高校の卒業式。

皆さん、泣いております。大号泣です。

でも、俺帰宅部だから先輩に知り合いいないから別に泣く気ないし。

「それでは、校長式辞。」

そんなこんなで、俺が周りの空気を全部スルーして眠気と戦ってる
ときに事件は起こった。

俺のクラスの副担任の連夜先生が

普通ならば『保護者の皆さまはご起立ください』というはずだった。
しかし、彼は……。

「ご来場のママ、パパはご起立ください。」

……。

場の空気が静まり返った。

俺 失笑

校長 啞然

保護者 直立不動

エミ 大爆笑
アカネ

委員長 泣きそうな顔

連夜先生 普段と変わらないむかつく笑顔

学校の体育館に一人の少女の笑い声が春の暖かい空気に乗って辺りに響き渡った。

そのとき、誰も動かなかった。いや、動くことができなかった（反語的表現）

一見、モデル並みの容姿を持った教師からパパ、ママという単語を聞いたんだ無理もない。

連夜先生がマザコンということは、あまり知られていない。

その後、何とか式は続行されたが、さっきまで泣いていた生徒は涙が乾ききっていた。

それは、涙を流しつくしてしまったのか。

それとも、他に理由があるのかは分からない。

ただ、最後に教頭が

「3年生の退場です。皆様、拍手で追い出しましょう」
って、言った瞬間はさすがに俺も笑った。

「教頭って、3年生嫌いなんだね!!」

エミのその言葉がまたまた、体育館に響き渡った。

教頭は、がんばって大きな拍手でごまかそうとしたが……無理だった。

ドンマイ、教頭。

第32話：春（全ての始まり、そして終焉）（前書き）

読者の皆様ごめんなさい。

作者、多忙のため更新が遅れました。

第32話：春（全ての始まり、そして終焉）

「ああゝゝ。．．．きづいいゝゝ」

こんにちは、リヨウです。

今日は、とても晴れたすばらしい日ですね！
もう春ですね。

『春』それは全ての始まりであり、全ての終わりの季節。

『春』それは新たな出会いの季節であり、それは別れの季節でもある。

『春』動物。たちは、目を覚まし新たな命を育む。

『春』植物たちは、太陽に向かって精一杯伸びてゆく。．．．．．。

春は、とてもすばらしい季節だ。

「．．．ずずゝゝ」

．．．．花粉さえなければ。

長々と、ごめんなさい。

要するに春なんか大嫌いだ！馬鹿やロウ！！

（春が好きな皆さん、心かお詫びします。BY作者）

「リヨウゝゝ」

エミも花粉症です。

「ねえ〜、ティツシュない〜？」

俺は、無言でエミにティツシュを渡した。

エミの顔がすごいことになってたけどあえて言わなかったのは俺なりの優しさだったのかもしれない。

「リヨウもエミもたいへんだねえ〜」

なら帰ってくださいよ、麻衣先輩。

と言えないのは、俺がヘタレだからではない。

たぶん……。

「……うるざいですよ〜（怒）」

やばい、エミの笑顔がヴェリイイイイイスウイイイイトだ。

「……オカマのくせに〜」

やばい、麻衣先輩の顔はヴェリイイイイクウウウルだ。

「そっちは、鼻が詰まって女とは思えない顔してるね（ハート）」

ROUND 1 START

第一ラウンドはエミの攻撃で始まった。

「先輩こそ、化粧とつたら人とは思えないような顔してるじゃないですかあ〜」

エミの先制攻撃

「そうだね、でも今のエミよりはましかな」

麻衣先輩のカウンター

「・・・・・・・・」

エミの怒りによって、第一ラウンド終了。

そして、第二ラウンドへ続いて逝くのであった・・・・・・・・。

その後、エミは花粉症を自力で治したらしい。

第33話：憂鬱

「・・・・・・・・・・」

今日で、春休みも終わりか・・・・・・・・。
ども、春休みの終わりを感じて、少し憂鬱なりヨウです。

「今年の春からもう俺も2年か・・・・・・・・」

そうです。

もう、明日から2年生です。
進化です。レベルアップです。

デジモ で風に考えると勇気の紋章が必要かもしれません。

「今年の春休みは・・・・・・・・」

・・・・・・・・。

はつきり言って地獄だったな。

でも、今年はまだいいほうか・・・・。

具体的には語らないが世の中知らないほうが幸せな事もあるとだけ
言っておこう。

「・・・・・・・・学校行きたくねえ・・・・・・・・」

どうしよ、ものすごく休みたい。

明日からまた地獄のような日々が始まるのか・・・・・・・・。

「でも、行かなかつたら行かないでどうせ、エミは来るんだろうな」

家だと、エミの毒舌に付き合い。

学校だと・・・

アカネの放送禁止用語に悩まされ。

あのマザコンのフォローとかしなきゃだしな。

「なんつーか、ガンバレ俺みたいな」

自分で自分をほめてあげたいよ。

「ファイトー俺！！」

ここで気合でも入れとかないと無理。

「・・・・・・・・リョウ。何してるの」

俺の部屋（2階）の窓のところにエミがいた。

客観的に見て俺の行動は頭が狂ってる人かただの寂しい人かの2択になるだろう。

「リョウ、ちょっと脈はからせて」

そう言つて、俺の手をとって脈を計り始めた。

「ご愁傷様・・・。脳死してます。もう生存は不可能ですね」

ガンバレ俺！

負けるな俺！！

第34話：留守番電話サービスセンター

「・・・めんどくせえ」

ども、今から連絡網を回さなければならぬリョウです。
なんで、名前順なんだよ。荻原だから必然的に前のほうになるじゃん。

連絡網にも身長順とかないのかよ。

「しかたない・・・まわすか」

めんどくせえ。

これから、出かけようとしてたところなのに。

連夜が急に『明日のことなんだけど（以下略）』というわけで、クラスの人に連絡しといてください。僕はこれからママとパパとディナーにいくんだ。』
ふざけんなアホ教師。

まずはアカネからだったな。

〃 〃

ガチャ！

「ただいま電話に出ることができません。〃〃」

なんだつながんないのか。

「ピーと言う発言の後にメッセージをどうぞ」

とりあえず、メッセージを言っとくか。

「（ピー）（注意：好きな18未満禁止用語をどうぞ）」

俺の手は音速の速さで携帯の電源を切った。

「……確かにピーだけださ……」

ピーはピーでもこれはだめだろ。

「次だ。……次」

次は確かエミだったよな。

~~~~~

ガチャ！！

「ただいま電話に出ることができません」

こっちも今電話に出られないのか。

「発信音の後にメッセージをのこさないでくださいね」

これおかしいだろ。

残すなってなんだよ。

「ピー」

「えーと、俺だけど明日（以下略）なんだって」

よしこれでいいか。

「……ピー」。削除されました」

何で???

### 第35話：ギターの果てに（前書き）

物語に出てきてる曲とアーティストがわかったら作者まで。

### 第35話：ギターの果てに

どもども、明日からのほんのひと時の安らぎに涙しそうなリヨウです。

エミの毒舌に日々耐えている俺からすればゴールデンウィークは神様に近いものを感じる。

「リヨウ、さっきから一人でなにぶつぶついつてるの？」

俺が部屋に戻ると当然のように俺のCDを勝手に聞<sup>イジ</sup>いてる、この毒舌なエミ。

「Huh!

Yeah, we're comin' back then with another bomb track  
Think ya know what it's all about」

しかも聞<sup>イジ</sup>いてるの俺の1ヶ月かけて必死に探した大切なやつじゃねえかよ。

探すの大変だったんだぞ。しかもいくらしたとおもってるんだ!?

「この曲いいね」

めずらしいなエミが褒めるなんて。

こいつは天性の毒舌<sup>あまのじやく</sup>なのに。

(ルビを振ればなんでもそう読める小説ならではの奇跡)

『Huh!』

Hey yo, so check this out

Yeah!

Know your enemy!』

「ギターの音が変わってるね」

（10分後）

あれから、エミはこの曲に聞き入ってしまったてようやく戻ってきた。

「これ聞いてて分かったんだけどね」

エミが、この曲を聞いている間に俺はベットのうえでイヤホンしてギターを弾いていた。

「何がわかったんだ？」

このバンドのギタリストは変わった奏法をするので有名だ。

「リョウってギター下手だね」

おれの自尊心は一瞬で消え去った。  
プライド

これでも後輩たちがよく俺に聞きにきたりとかしてるんだけど・・・

・・・。

・・・もつと練習しよ。

彼がこの先ギターで栄光を取るかどうかは作者ですら知らない。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1074d/>

---

天然彼女

2010年10月11日04時37分発行